



■今年の国語は！？

出題形式変更。内容について大きな変更はない。

■出題形式

これまで上下2段組で文章と設問があり、文章の終わりに語注が
 ついていたが、今年度（'20年度）は学校教科書と同じような段組み
 で文章の下段に語注がつく形式であった。昨年度（'19年度）までは
 〈文章Ⅰ〉と〈文章Ⅱ〉と異なる出典からの2つの文章を読ませて
 出題する形式であった。今年度は【問題一】と【問題二】は同じ出
 典からの文章であった。また、150～200字の作文問題については、昨年度や'17年度までの「2つの文章に共通するメッセ
 ージ」をテーマとする作文問題に似ている。また、作文問題以外で字数制限のない記述が出題されたのは'17年度以来である。
 全体としては、「形式」は変わったが「傾向」は大きく変わっていない。

	2018年度	2019年度	2020年度
制限時間	50分	50分	50分
大問数	1問	2問	1問
小問数	10問	11問	10問
配点	100点	100点	100点

※ 最高点、平均点等は非公表。

■出題内容

〈文章Ⅰ〉 論説文：『挑戦する脳』茂木健一郎 約4500字 集英社

〈文章Ⅱ〉 論説文：『挑戦する脳』茂木健一郎 約450字 集英社

漢字については、'18年度「対ショウ的」、昨年度「フク雑」、今年度「画キ的」と「同音異義語」を選ばせる問題が出題さ
 れている。接続語については、例年、空欄に当てはまる接続語の組み合わせを答える問題が出題されていたが、今年度はな
 かった。しかし、段落を前半・後半の二つに分ける問題が出され、「ところで」を手掛かりにして答えさせているものがあ
 った。知識分野については'18年度の「[足]を用いた表現」、昨年度の「[馬]を用いた表現」と慣用句・ことわざに関するものが2
 年続いたが、今年度では、本文の内容とほぼ同様のことを表したことわざ（[目]を使ったことわざ）を選ばせる問題が出され
 た。読解問題については、「要点をとらえる」ための「言い換え問題」や「対比問題」、「主張をとらえる」ための「記述作文問
 題」など、例年通りであった。また、本文のある部分についての対話文（約750字）中の空欄補充問題が今年度も出題された。
 作文については「【問題一】と【問題二】の文章の——線部から、筆者は「挑戦」をどのようなものと考えていることがわか
 りますか。また、筆者の「挑戦」のとらえ方に対して、あなたは、どのような考えをもちましたか。」という記述作文問題が出
 題された。形式は少し変わっているが、どちらも本文の要点を踏まえて書くことがポイントになる問題であったことから、本質
 的にはこれまでのものと変わりはないと言える。

■合格に向けての対策

対策として大事なことは過去の『適性検査』を反復練習することです。では、どういうところにポイントをおいて反復練習
 すべきでしょうか。それは、「筆者がこの文章でなにを伝えたいのか[本文全体]」ということと、「伝えるためにどのような方
 法を使っているのか（文脈把握…比喩・例示・段落構成など）」を意識して読むということです。そういう点で、昨年度の入試
 分析会資料でも述べたように、「[本文全体]についての問題よりも[文脈把握]の問題が多数を占めたことから、出題内容
 が私学入試よりになりつつあると言えるだろう。」というところに変化はありません。特に今年度の適性検査問題は、筆者の主
 張につながるような流れを一つひとつの設問が作っている良い問題でした。難度は決して高いわけではありません。[本文全体]
 を把握しているかどうかを訊ねる問題において、選択肢問題や空所補充問題で終わらず、記述作文問題として出題されていま
 す。そのため、テキスト等の問題を用いて基本的な読解技術を習得することも大切ですが、様々な中学入試の過去問で演習を
 するときには「その問題の意図は何か（何のための問題なのか）」「筆者の主張が何なのか」「その考えについて自分はどう思
 うのか」などを考えながら、解かなければなりません。語彙についても「同訓異字」・「同音異義語」に注意をし、「四字熟語」・「こ
 とわざ」・「慣用句」等も幅広く学習をしておく必要があります。そして、もう一つ大切なことは「記述作文」への対応です。
 これは、「自分の考え」が必ず訊ねられるので日頃から社会の出来事に関心を向け、自分で調べる等の姿勢が必要です。また、
 作文は書いたものは必ずだれかに見てもらうことで、「独りよがりではない、伝わる文章」を書く力をつけてください。



■今年の算数は！？

作業系(調べ上げ系)の問題はそのままに、速さの問題が復活！取りにくさは相変わらず。

■出題形式

国私立中学校入試問題に準じる形式。小問 1 問のみで構成される大問から、小問が複数あり、各小問が次の小問のヒントになるような大問まで、バラエティに富んでいる。今年度（'20 年度）に関しては、すべての大問に於いて、小問が複数あるスタイルであった。

	2018 年度	2019 年度	2020 年度
制限時間	50 分	50 分	50 分
大問数	5 問	5 問	5 問
小問数	21 問	21 問	24 問
配点	100 点	100 点	100 点

※ 最高点、平均点等は非公表。

一方、国私立中入試問題に見られる計算問題が出題されないことが特徴で、検査時間は府立一貫校と同様で 50 分となっている。

■出題内容

- ① 資料やグラフの読み取り、論理 ② 平面図形（平面充填含む） ③ 速さとグラフ（特別なグラフ）
④ 立体図形（展開図） ⑤ 調べ上げ系の問題（プログラミング・論理・場合の数）

① '13 年度から同様の出題が続いている。表と資料を 1 つにまとめる問題。何を求めるかと、どのように計算し、どのように答えるかを把握することが必要である点は変化なし。'17 年度、'18 年度と同様、問題文は読みやすかった。過去問をやっていれば面食らうこともない問題。(1)、(2)、(3)は必須正解問題。(4)は比と割合の文章題で、比較的解きやすいが差がつく問題。② (1)、(5)は問題文が理解できるかですべてが決まる。(2)～(4)は確実に正解したい。学校側が想定したであろう、「(2)の図の一部分を取り出せば(5)の解答の一例となることに気づいてほしい。」というような構成。しかし、気づいた受検生は少ないかと思われ、逆にこの問題でペースを乱してしまった受検生が相当数いるのではないかとも思われる。③ 速さとグラフの問題。昨年度（'19 年度）のグラフ同様、状況想定が難しく、さらに今年度は今までに見たことのないグラフであった。この状況からいつも通り状況図やダイヤグラムを描き上げることができたかどうかで正解できた問題。(1)、(2)が正解できれば十分で(3)～(5)は捨て問。④ 展開図の一部だけが描いてあり、必要なものを補うというスタイル。時間と根気のいる問題で時間切れになった受検生も多いはず。いかに問題を捨てることができるかを問う問題とも言える。(1)を正解し(2)～(4)は捨ててもよいが、ここで正解できたら得点源になったはず。残り時間を確認しながら、判断してほしいところ。⑤ プログラミングを素材にした、条件に従って調べ上げる問題。(1)も(2)も東西南北を整理して調べれば平易。ただし、④までの問題構成により、厳しい状況に追い込まれている受検生の心理状態を考慮すると、心折れて正解できなかった者も多かったかもしれない。(3)も比較的解きやすい。差がつく問題であろう。(4)は難しいが状況設定を理解できると解ける問題。

問題構成・難易度を考慮すると 4 割が合格ラインだったと推定される。

■合格に向けての対策

グラフや資料の読み取りに関する問題は過去問等で訓練しておきましょう。難解な表現を用いられているので、根気よく理解する姿勢が重要です。速さに関する問題は、さまざまなパターンで出題される可能性があるため、入念な対策が必要です。

総じて言えることは、「何を出题されても面食らわないこと。」です。小学校算数のレベルを上回るものばかりで、難易度が高く、ジャンルや表現法等、内容を難解にする工夫が随所で施されていて、時間のかかる問題が多いです。したがって、文章読解能力、計算力、書き上げる力、調べ上げる力をつけておくことが肝要です。また、女子は洛南高附の併願校として本校を選ぶケースが多く、その分学力の高い生徒も受検しています。男子も、もはや洛星と同等のレベルにあります。

頻出分野ごとの対策は次の通りです。①数の性質に関する問題は、比較的難易度の高い問題が例年出題されます。難関私立受験に対応できる学習をしておきましょう。難関私立中の数の性質（素数、約数、倍数）、場合の数の問題を解いて慣れておくといよいでしょう。②割合に関する問題は、平易な問題が多いので、難関私立中の基礎内容だけを学習しておきましょう。比例や相当算、棒グラフ等の学習をしておくのが望ましいです。③立体図形は、展開図、見取り図、傾けた水槽、サイコロの積み上げ、サイコロ転がし、立体の色塗り、表面積を求める問題が出題されています。再び同じタイプの問題が出題される可能性もあるので、過去問で十分に対策を積みましょう。④速さに関する問題は、条件設定が複雑（長文問題、途中で休憩、変速する等）なので、条件を整理し、結果がどのようなかをイメージする練習を反復しておきたいところです。

最後に、例年難問が出題されますが、難問を無理に解くよりも、基本問題を確実に正解して合格に近づく方が得策です。手間はかかるが難易度は低いという問題を速く正確に処理する力を養っておきましょう。「ルール」を定められた問題を数多くこなし、作業→思考という流れの問題に慣れておくことが大切です。あわせて、うまく捨て問を回避する練習をしておくように心掛けてください。



■今年の理科は！？

傾向は昨年とほぼ変わらない。

■出題形式

この3年間で出題傾向は大きく変わらず、大問数が1問増えただけである。小問数が大きく増えたわけではないので、得点の仕方や時間配分は昨年と同等と考えればよいだろう。記述問題は、'18年度9問→昨年度（'19年度）2問→今年度（'20年度）3問と変化しており、昨年度と同じく中学入試によく出題される定型記述ではなく、問題文を読んで内容を書く、思考力が問われるものであった。受験者平均点、および合格者平均点は公開されていないが、合格するには60%~70%ほどの得点が必要であったと推測される。

	2018年度	2019年度	2020年度
制限時間	50分(理社)	50分(理社)	50分(理社)
大問数	3問	3問	4問
小問数	19問	16問	19問
配点	100(理社)	100(理社)	100(理社)

※ 制限時間・配点は理科分野も含む。
※ 配点、最高点、平均点等は非公表。

■出題内容

- | | | | |
|---|---------------|---|----------------|
| 1 | 物理 空気鉄ぼうと水鉄ぼう | 2 | 化学 炭酸水の性質とつくり方 |
| 3 | 地学 月の満ち欠け | 4 | 生物 ヒトのからだ・生態系 |

1 (1)は、「力を加えたとき、空気は押し縮めることができるが、水は押し縮めることができない」という基本的な知識があれば解くことができる問題である。問題文とその実験の内容を読み、空気が押し縮められた割合によって反発する力が変化することに気づけば、(2)も容易に合わせることができる。(3)は条件の設定がわざと緩くしてある記述問題である。車のブレーキに適しているものを選択肢から選び、その理由を記述させる問題で、それぞれに異なる利点があるため、どの視点から考えるかによって解答が複数考えられる。実際の車両のブレーキとして「空気ブレーキ」「油圧ブレーキ」「空気油圧混合ブレーキ」の3種類があることをもとに作られた問題であると推測される。思考力をもとに自らの考えを書かせる内容であった。

2 (1)は水溶液の液性とリトマス紙の色の変化についての問題であるが、乾いたリトマス紙に二酸化炭素をふきつけても色の変化が見られないことを問う内容で、実際にリトマス紙を使った経験をしているかによって解きやすさが変わる。(2)は二酸化炭素の溶解度についての計算問題である。「半分の体積に押し縮めた二酸化炭素」は溶解度も2倍になるという条件が問題文中にあるので、そこに注意しなければならない。(3)は問題文からも読み取れる「気体は水温が低い方がよくとける」ということから容易に解くことができる。(4)は字数制限10字での記述問題であるが、書く内容が限られるため難易度は高くない。(5)は、「未開封のペットボトル内では水から二酸化炭素が出てきても、再度水にとける。」という内容を字数制限20字でまとめるものとなっている。中学入試としては、難易度は高めである。

3 (1)~(3)のすべてが月の単元における中学入試で頻出の基本問題である。(1)については、少し考えさせるために、月ではなく気球についての問題になっているが、地球から太陽までの距離が非常に大きいことに気づくと正答に辿りつける。

4 (1)(2)のすべてが生物分野の基本問題である。あまり思考力は求められない一問一答タイプの問題となっている。

■合格に向けての対策

この3年間で出題傾向は定まってきたように感じます。求められているのは、単純暗記では解くことができない問題を解くための読解力と思考力です。しかしながら、中学受験に必要な知識や暗記事項が不要かといえば、そうではありません。知識や多様な問題を解く経験が土台としてあつての思考力です。今年度でいえば、4つの大問のうち2つは、中学受験の問題を数多く演習していれば、短時間で解くことができ、かつ全問合わせることも可能な内容でした。つまり、西京高校附属中学に合格するためには、中学受験で出題されることの多い全単元の基本的事項を確実に抑え、得点することができる問題をミスなく合わせる力と、読解力・思考力が求められる問題に対応できる力が揃っていなければなりません。

前者の基礎力は、私立中高一貫校に向けた学習で身につくものです。最難関私立に出題されるような高難易度の問題を解けるようにするのはなく、どの私立中学にも出題されるレベルの問題を100%解けるようにすることが目標です。後者の読解力・思考力は、日常生活も含めた日々の訓練・経験・考察で得られるものであり、一朝一夕では手に入りません。日頃の生活の中で、どのような視点を持って過ごしているかも大切です。理科の学習に関することならば、例えば問題にかかっている実験の内容が頭の中でイメージできるかどうかがかぎとなります。また、その内容に関する言葉の意味を知っていることはもちろん、自分がこの実験を行った場合、どのようなことが起こるのかを、柔軟に、臨機応変に考えることができるかどうかです。日頃から理科の事柄・事象を立体的に想像すること、そして想像しにくいものについては実際に体験してみることが効果的です。



■今年の社会は！？

出題意図が曖昧な出題減「易化」 歴史…テーマ別時代区分 地理…データ分析・文章解答問題減 公民…出題無し

■出題形式

適性を見る検査Ⅲに、理科分野共に社会科分野も含まれている。制限時間は理科と合わせて 50 分で、配点は理科と合わせて 100 点であり、社会科分野の配点は実質 50 点分と推測される。大問数は、今年度（'20 年度）も大問 3 問であった。小問数は 11 問であった（各小問中に複数の解答を要するものも含めている）。最高点・受験者平均点・合格者平均点はすべて公表されていない。

	2018 年度	2019 年度	2020 年度
制限時間	50 分(理社)	50 分(理社)	50 分(理社)
大問数	2 問	3 問	3 問
小問数	22 問	20 問	11 問
配点	100 (理社)	100 (理社)	100 (理社)

※ 制限時間・配点は理科分野も含む。

※ 配点、最高点、平均点等は非公表。

■出題内容

【問題 5】 地理…日本および地中海沿岸の「気候」をテーマにした、会話文に基づく総合問題

【問題 6】 歴史…時代ごとのカード A～E、及び資料(写真・絵画)に基づく問題

【問題 7】 地理…日本のおもな工業地域・四大工業地帯をテーマにした問題

【問題 5】 昨年度までと比べて非常に得点しやすくなっている。(2)空欄補充問題は頻出であるが、(い)、(え)などについては、資料中の語句「山陰」「南四国」を抜き出せばよい。(3)文章解答の問題であるが、これまでにはあまり見られなかった、オーソドックスな解答しやすい内容である。当然、「冬の積雪量が多い」という内容で確実に正答しておきたい。(4)地中海性気候の理解は当然必要なく、《メモ》を参考にして、夏の降水量の少ない雨温図を選択することが可能である。【問題 6】 こちらも昨年度（'19 年度）までと異なり、A～E のカードの時代がわかりやすく、それに基づく小問も全体的に正答しやすくなった。(1)～(3)までは確実に正答したい。しかし(4)(5)は、これまでにたびたび見られた、出題意図が曖昧（つまり受検生にとっては解きにくい）な問題である。このような、一見して正答の方向性が全く見えない小問は、速やかに後回しにて、つぎの解ける問題にすむべきである。【問題 7】 すべて文章中の空欄補充問題となっている。(2)(え)(お)には複数の解答が想定できよう。公民分野からの出題は、今年度も見られなかった。過去、'15 年度、'16 年度、'18 年度には出題されている。京都市教育委員会が発行している募集要項にあるように、「与えられた課題を理解し、自然や社会の事象を科学的に思考、表現する力を測る」出題が、豊富な資料・データ分析及び記述解答問題という形で随所に見られる。

西京附属中の問題は、例年出題意図が曖昧（つまり受検生にとっては解きにくい）な問題が含まれ、学校教科書の内容では対応しかねる「細かすぎる・深すぎる（つまり、正答しづらい）」出題も複数問見られ、昨年度はそれが特に顕著であったため、社会科が得点源の受検生には非常に不利な受験であった。得点率も低かったと推測されるが、その点が考慮されたのであろうか、今年度はそのような出題が減少し、得点しやすくなったことは朗報である。次年度（'21 年度）以降も、意図的に社会科を蔑ろにせず努力した受験生が報われる出題であってほしい。

解答形式は、短い記述解答問題・空欄補充問題が多く見られる。出題分野については、地理分野・歴史分野は必ず出題される。公民分野の出題については上述通りである。次年度以降に向けては、やはり学校教科書レベルの基本的な内容の公民分野の押さえは当然必要となる。

■合格に向けての対策

歴史分野・地理分野共に、公立中なので、あくまでも学校の教科書の学習内容に即する前提があります。学校の教科書に含まれる内容については最低限の「知識」としてはおさえておきたいところです。とはいえ次年度以降も、上述通り学校の教科書を通読してさえいけばすべて解答できる内容ではないであろうと思われるため、私立中受験に必要な最低限の知識も持ち合わせたいところです。特に、歴史分野では「人物」「文化」「建築物」について、地理分野では「都道府県」の地図上の位置・形・県庁所在地・隣接県、「第一次産業」「第二次産業」を特に理解すべきです。出題数の多い文章解答問題・短文空欄補充問題の対応について、社会科に限っては文章解答問題に必要な力は、文章記述力よりも「知識」となります。文章解答問題対策については、過去問は慣れ程度に、とにかく多くの「知識」を増やす学習を強く意識して取り組んでいってください。

解答時間が 50 分ですが、理科分野と合わせての「適性を見る検査Ⅲ」であるため、単純に割ると社会科分野にかけられる時間を 25 分とすると、解答時間としてはかなり短いと思われます。限られた時間で解答する最低限のスピードも求められます。要領よくできる問題から取り組んでいくという「戦略」が絶対必要です。曖昧な問題を後回しとし、知識系のできる（わかる）問題から効率よく解いていく必要があるでしょう。よって、過去問演習においても日ごろのテスト類においても「時間配分」を常に意識をして取り組んでいく必要があります。